

ポラリスを仰ぐ北の大地から

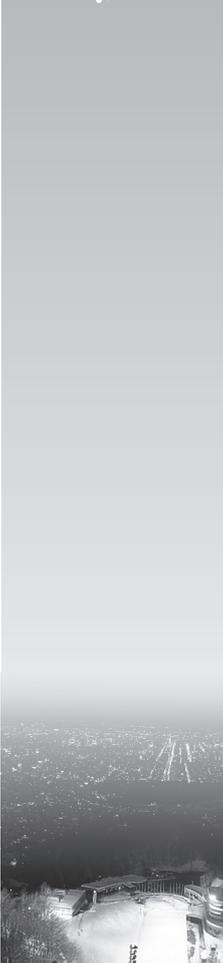


○ (オー)

遠軽医師会 会長 田中 実

世界的に人気の高いサーカス団「シルク・ド・ソレイユ」の作品中、最も芸術性の高い作品と言われる「オー」。フランス語の「水」をテーマにした舞台は、噴水ショーで知られるベラージオ・ホテルに550万リットルもの巨大プールとして建設されました。初演は1998年で今でも人気のロングランショーですが、初演間もない頃にバルセロナ五輪シンクロの銅メダリスト奥野史子さんが参加するなど、一流アスリートがプールという舞台で行うパフォーマンスに興味を持ちラスベガスへの旅を企画しました。しかし出発1週間前、アメリカ同時多発テロが発生し、泣く泣くキャンセルとなりました。

それから十数年後、チケットは当時とは違いインターネットで購入できるようになり、水がかかると注意書きがある最前列しか空気がなかったオーケストラ席を、水がかりを覚悟で購入し、ラスベガスへ旅立ちました。ショーの内容は空中ブランコ、シンクロナイズドスイミング、そしてアクロバットが中心ですが、世界各国より集まった一流アスリートによるパフォーマンスは、一般のサーカスで観る演技とはその美しさにおいて全く違ったものでした。さらに空中や水中から登場するパフォーマーが同時進行的に演技を行うため、目が3つ4つ欲しいほど複雑多彩なもので、しかも今まで走り回っていたステージに突然空中から飛び込むなど、水深を調節する裏方との駆け引きのすごさをも知ることになりました。開演前と90分ほどの公演中に2度ほど登場する2人のピエロによる無言劇のショータイムは観客の笑いを誘い、よい息抜きとなっていました。覚悟していた水かぶりもほとんどなく、パフォーマーの技術のみならず息づかいまでも感じる事ができ、ラスベガスのステージでしか味わうことのできない非現実的な世界を満喫することができました。



サロマ湖100km ウルトラマラソン

美幌医師会 会長 田中 克彦

6月25日午前1時過ぎ、私はスマートフォンの目覚ましで目が覚め、すぐに外の天気を確認しました。「雨か…」。溜息をつきながらも身支度を終え、常呂のスポーツセンターに車で単身向かいました。4回目のウルトラマラソンの参加当日です。去年は3回目にして念願の完走を果たしました。マラソン仲間4人と一緒に何とか完走できましたが、今回は1人です。それも雨。「やれやれ…」。

今年は悪天候なので例年より参加者が少ないかなと思っていましたが、スタート地点に着くと例年同様の数のランナーがすでに並んでいました。みなさん、さすがのウルトラランナーと感心している間に午前5時のスタートです。制限時間13時間、サロマ湖の周り100kmを、2000人以上のランナーがゴールを目指します。

「焦らずにゆっくりと」自分に言い聞かせながら、ただ「黙々と」「ヒタヒタと」私は雨の中を走り続けました。30km、フルマラソンの距離を通過し、ウルトラマラソンの世界に入りました。足の痛みもなく、疲れも感じていません。「完走できそうだな」と考えながら55km付近の休憩所で休憩を取りました。着替えの最中に、Tシャツが濡れていたためなかなか脱げずに、もがいていたところ、隣のランナーがみかねて手伝ってくれました。後半戦、再び走り始めます。ずしんと体の重さが急に堪えてきました。60kmを過ぎたあたりから、悪い癖で、リタイアする理由を思索し始めました。「体が冷えて動かない」「足に痛みが出始めたのでもう止めようか」。それでも悪魔のささやきを打ち消しながら走り続けました。70km付近で知り合いの脳外科の先生にお会いし「一緒に完走しましょう」と激励され、一時は奮起をしましたが、それもつかの間。10時間走り続け、77.5kmの休憩所で、寒さ、体の重さに負けリタイアしました。今年の私のサロマは終わりました。「もう2度とこんな過酷な大会には参加しない」とリタイアをするたび考えます。しかし、原稿を書いている今、来年は2度目の完走報告を北海道医報に載せたいと考え始めました。「やれやれ…」